訳者　稲田定雄
1909年福岡県に生まれ，1934年大阪外国語学校ロシヤ語部卒業。現在日本ロシヤ文学会評議員。
主要著訳書　『レールモントフ抒情詩集』（創元文庫），詩論集『愛について』（現代社），『プーシキン抒情詩』（平凡社），プーシキン『サル（角川文庫），エレンブー（勁草書房），『パステル書店）など。

世界の詩集　16
マヤコフスキー詩集

昭和四十八年六月二十日　初版発行
昭和五十三年六月十日　三版発行
訳者　稲田定雄
発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
振東京三一九五二〇八　電二〇二一
電話東京（二六五）七二一（大代表）

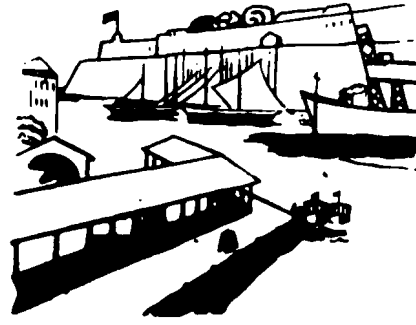
写植　株式会社写研
製版　植竹プロセス製版株式会社
印刷　暁美術印刷株式会社
製函　三真堂印刷紙器株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

0398-590316-0946(2)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目

次



港　七
だが　きみらだって　できたろうに　八
聴いてください　九
だが　それでも　一一
バイオリンも　すこし神経質だ　一三
楽長のことをあれこれ　一六
すべてのものに　一八
リーリチカよ　二六
安売り　三〇
月　夜　三四
愛する自分へ　作者が　この詩行をささげる　三五
雲が幾片　三九
馬との良いあいだがら　四一
詩人労働者　四五
夏に別荘で　ヴラジーミル・マヤコフスキーに起こった　異常な出来事　四八
お嬢さんの扱いかた　五六
〈タバコ・ケースが　草の中に……〉　五七
会議にふける人びと　五九
タマーラと悪魔　六三

深い場所で　浅い哲学　七三
ブラック・アンド・ホワイト　七七
熱　帯　八五
詩歌についての財務監督官との会話　八九
愛　一〇五
火のお馬　一一四
愛の本質について　パリから　同志コストローフへの手紙　一二一
タチヤーナ・ヤーコヴレヴァへの手紙　一三三
ソビエト旅券の詩　一三八
〔未完の詩の断片〕　一四五
ズボンをはいた雲　一四八
背骨のフルート　一九三
声をかぎりに　二一三
解　説　二三五
年　譜　二五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マヤコフスキー詩集

港

水のシーツが　腹の真下にあった
それを　白い歯が　引き裂いて　波だたせていた
らっぱが　ながながと咆(ほ)えていた――それはまるで
らっぱの銅で　恋と情欲を　注いでいるようだった
ボートがいくつ　港の入口の　揺りかごの中で
鉄の母親たちの乳首に　ぴったり寄りそった
つんぼになった汽船たちの　耳の中では
錨(いかり)の耳かざりが　いくつも燃えていた

だが　きみらだって　できたろうに

ぼくは　コップの絵の具を　ぶっかけて
立ちどころに　平日の献立表を　塗りたくった
ぼくは　大洋のゆがんだ頬骨を
煮こごりの皿の上で　見せてやった
ぼくは　ブリキの魚の　うろこの上に
新しい唇(くちびる)のさけびを　読みとった
だが　きみらだって
下水道のフルートで
夜想曲(ノクターン)を　かなでることが
できたろうに

聴いてください

聴いてください
ほんとうに　星たちが　火をともしているとすれば——
つまり——これは　だれだかに　必要なのでしょうか
つまり——星があるようにと　だれかが　のぞんでいるのでしょうか
つまり——だれかが　こういう取るにたらぬものを　真珠だと
名づけているのでしょうか

そして　くたくたに疲れながら
真昼の　ほこりの吹雪にまみれて
その人は　神のもとへ　馳せ参じます
おくれたことを　恐れています
泣いています
神の筋張った手に　くちづけをしています
ぜひとも星があるようにと——
願っています
こんな星のない苦しみには　堪えられないと——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

誓っています
だが　やがて
内心は　不安だけれど　外見は
穏やかなその人が　歩いて行きます
その人が　だれかに　こう言っています
「ほんとうに　今　君は平気なのか
恐ろしくないのか
そうだろうね」
聴いてください
ほんとうに　星たちが
火をともしているとすれば――
つまり――これは　だれだかに　必要なのでしょうか
つまり――これは　宵ごとに
屋根という屋根の真上で
たとえ　一つ星であっても
火をともすようにするのが　ぜひとも必要なのですね

だが　それでも

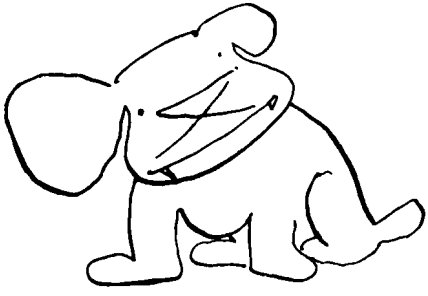
街は　梅毒患者の鼻のように　くずれ落ちた
川は――よだれとなって　流れ出た色欲だ
最後の一枚まで　下着を脱ぎすてて
六月の庭園は　淫らがましく崩れてしまった

おれは　広場へ出て
焼きはらわれた一区画を
赤茶けたかつらのように　頭にかぶった
人びとは　恐ろしがっている――おれの口からは
噛みきれなかった叫びが　足をばたつかせているので

けれど　おれは非難されず　罵倒されず
預言者のように　おれの足跡は　花に敷きつめられよう
鼻のようにくずれ落ちたこの連中は　知っているのだ
おれが――きみらの詩人だ　ということを

居酒屋のように　おれは　きみらの審判を恐れるのだ
売笑婦たちは　燃える建物をかいくぐって
おれひとりを　聖なる宝物のように　抱いて運び
おのが無罪のあかしとして　神に見せるだろう

神も　おれの小さな本を見て　泣き出すだろう
言葉にはならず――ねばりついて　一塊になった痙攣なのだ
そして　神は　おれの詩を小脇にかかえて　天空を駆け
息を切らせながら　知合いたちに　それを読んできかせるだろう



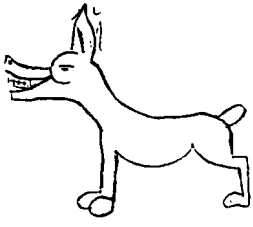
バイオリンも　すこし神経質だ

バイオリンは　嘆願しながら　いら立った
そして　だしぬけに　わめき出した
それが　とても子供っぽかったので
太鼓が　がまんしきれずに
「いいよ　いいよ　いいよ」と　言ったほどだった
ところが　自分は　くたびれてしまい
バイオリンの話を　終わりまで聴かずに
燃えている鍛冶（クズネーツキー・モースト）橋通り*へ　馳け出し
行ってしまった
バイオリンが　思うぞんぶん泣いているのを
オーケストラは　よそよそしく見ていた
無言のまま
拍子（ノート）も　取らずにだ
ただ　どこかで
愚かな皿が　一枚

がちゃ　がちゃと　音をたてていた
「なんだろう」
「どうしたのだろう」
だが　銅の面をして
汗だらけの
吹奏楽器が
「馬鹿野郎
泣き虫め
拭き取れ」と
どなったとき――
ぼくは　立ちあがり
恐怖のため　かがみこんだ楽譜台や
楽譜を横切って　ふらふらと這って行き
なぜだか
「神さま」と　叫んだのだ
ぼくは　木づくりの首っ玉に跳びついた
「あのね　バイオリンさん
ぼくたちは　恐ろしく似ているね
ぼくも　こうして　やっぱり
大声で叫んでいるのに――

証明するなんて　なんにもできないんだからね」
楽師たちが　笑っている
「すっかり　ねばりついたな
木の花嫁のところへ　行くなんて
頭にきたんだな」
だが　ぼくは――かまわないのだ
ぼくは――いい人間なのだ
「あのね　バイオリンさん
さあ――
いっしょに暮らそうよ
ねえ」

＊鍛冶橋通り　モスクワの中心街の一つ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com